新世紀ミュージアム

雲仙岳災害記念館／日本

日髙 真吾（ひだか しんご）　民博 人類基礎理論研究部

一九九〇年一一月から一九九六年六月の噴火終息宣言まで続いた雲仙岳の平成大噴火。この噴火災害の教訓を今に伝える、日本で唯一の火山体験ミュージアムを紹介する。

雲仙岳災害記念館とは

雲仙岳災害記念館（がまだすドーム）は、一九九〇年一一月から一九九六年六月まで続いた雲仙岳の噴火災害の教訓を伝える博物館である。二〇〇二年七月に開館したこの博物館は、日本で唯一の火山体験ミュージアムとして、多くの来館者を迎えている。雲仙岳災害記念館の愛称は、がまだすドームという。「がまだす」とは、島原地方の方言で「がんばる」という意味であり、雲仙岳災害記念館の役割を的確にあらわした愛称といえる。

雲仙岳の平成大噴火

平成大噴火とされた、雲仙岳の噴火災害を簡単に振り返りたい。雲仙岳は、一九九〇年一一月一七日に一九八年ぶりに噴火した。一九九一年五月には巨大な溶岩ドームが確認され、そして六月に大火砕流を発生させた。このとき、消防団員や火山学者、報道関係者ら四三人が死者・行方不明者となるなど痛ましい被害をだした。そして、この噴火活動は一九九六年六月まで続き、山頂付近に溶岩ドームである平成新山を出現させた。

雲仙岳災害記念館の全景（掲載写真はすべて2017年3月に撮影）

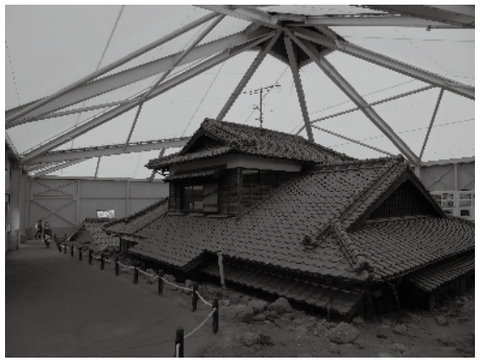
雲仙岳災害記念館は、平成大噴火による自然の脅威と、災害から得た教訓を風化させることなく、正確に後世に伝えることを目的とした博物館である。その開館時期は、一九九五年一月一七日に発生した阪神・淡路大震災の記憶を伝えるために二〇〇二年三月に開館した「防災未来館（現在、人と防災未来センター）」とほぼ同時期である。したがって、日本における大規模災害の展示施設として、草分け的な存在と位置づけることができる。

雲仙岳災害記念館の展示内容

雲仙岳災害記念館の展示は、一階と二階にわたって九つのコーナーに大別されている。まずはマグマに包まれるような印象をもつ導入部分の「マグマゲート」を抜けると、火砕流で焼け焦げた木々を展示した長さ三九メートルの「火砕流の道」とよばれる展示がある。ここでは、床を火砕流と同じ時速一〇〇キロメートルで光が駆け抜けることで、その速度を体感できる。その後、実際の火砕流や土石流の映像を基にして制作された雲仙岳の噴火を体験できる「平成大噴火シアター」を観覧して、噴火で被災した電柱や電話、車両などが展示される「焼き尽くされた風景」の展示と、雲仙岳の噴出物の標本である「平成噴火噴出物のはぎ取り標本」の展示にいたる。ここまでの展示で、雲仙岳の平成の大噴火の概要とその脅威が理解できる仕掛けとなっている。

「焼き尽くされた風景」の展示コーナー

次に、現在の雲仙岳の様子を鳥の目線で見ることができる「フェニックス・アイ」、「島原大変肥後迷惑」といわれた寛政四年（一七九二年）の大噴火の歴史を知ることができる「島原大変劇場」へとつながる。続いて、二階に移動すると、一九九一年六月三日の大火砕流で犠牲になったカメラマンの被災カメラと、カメラに残されていた実写映像（撮影時間三七八秒）を基に編集されたドキュメンタリー番組「雲仙・大火砕流378秒の遺言」を見ることができる。最後に、被災した方々から来館者へのメッセージを伝える「明日へのメッセージ」から、被災者の気持ちを知ることができる。これらの展示からは、火山噴火時の避難の重要性、防災の意識の重要性を知ることができる。



土石流被災家屋保存公園

そのほか、雲仙岳災害記念館の関連施設として、車で五分程度はなれたところに、土石流被災家屋保存公園がある。ここでは、雲仙岳の平成大噴火による土石流に飲み込まれた家屋がそのまま保存・展示されており、当時の被害の大きさを直接感じることができる。

災害の記憶を伝える展示の役割

災害の展示は、大きく三つの段階に整理することができると考える。ひとつめは、災害発生から比較的早い時期におこなわれるもので、被災地の社会背景を見つめなおし、その地域で育まれた文化に配慮した復興計画の必要性を提示する展示である。ふたつめは、被災地から学びを得て、他の地域において将来の防災、減災を考える展示である。そして、三つめは、これまでのふたつの段階の展示を継承しながら、災害の経験や記憶を後世に伝えるためのメモリアルとしての役割を期待される展示である。これは、大災害の経験を学び、次の災害への備えとすることを目的とした展示であり、被災地における災害の記憶の集積地として、被災地につくられるものである。まさに、雲仙岳災害記念館はこの役割を担った展示施設といえる。

雲仙岳災害記念館は、過去の災害によって引き起こされた被害の原因を分析しつつ、災害の記憶そのものを伝えていく役割を担っており、その目的に十分到達できる展示内容になっている。一方で、時間の経過にともなって来館者の記憶が薄れると、展示内容の理解を促すことは難しくなると考える。これを防ぐために災害の記憶の再検証と展示の更新は定期的におこなわなければならないだろう。このような点も考慮されたのだろうか、雲仙岳災害記念館は二〇一七年度にリニューアル工事に着手する。平成大噴火が発生した一九九〇年から二七年、噴火が終息した一九九六年からは二一年、二〇〇二年の開館からは一五年を経た雲仙岳災害記念館。この時間経過のなかで、あらたに得られた知見や教訓がリニューアルに反映されることだろう。そのうえで、災害当時の生の記憶をどのように伝えるのかという点にも注目したい。リニューアル後の雲仙岳災害記念館に再び訪れてみたいと思う。